2018年1月14日（日）

中原キリスト教会礼拝

　　　　　　　　　　　　　　**「ダビデ契約」**

聖書箇所：第一歴代誌17:1-15

　この箇所は神様がイスラエルの王ダビデに永遠の祝福を約束された箇所として有名な箇所です。第二サムエル記7:1-17にほとんど同じ内容の記事が記されています。まず、歴代誌という文書について簡単に述べます。サムエル記と列王記はイスラエルの歴史について書かれた書物です。預言者サムエルが民衆の要求にこたえるため、サウルをイスラエルの王に任命する神の言葉を告げるところから、最後ユダ王国の滅亡のところまでの歴史です。長期間の編集期間を経て成立していると考えられますが正典として完結したのはバビロン捕囚の時期、即ちBC6c頃と言われています。これに対し、歴代誌は北王国を無視しサウル王の死からユダ王国の滅亡までです。南王国ユダ王国にのみ着目し、北王国のことは無視しています。特にダビデとソロモンに着目しています。成立年代はBC5-4cであり、旧約聖書の正典化の歴史の中では最も新しいものです。歴代誌の編纂過程ではサムエル記や列王記が参照されたことは当然ですが、その他にもいくつもの文書が参考にされたと考えられています。歴代誌記者はイスラエル信仰の正当な継承者は南ユダ王国であって北王国は信仰を共にする者とは見做してはいなかったと思われます。歴代誌と日本語で称されていますが、これはラテン語Chronica、英語のChronicleの訳です。“時代の記録“の意味です。しかし、ヘブル語聖書原典では「dibre:hayami-m」、”日々の出来事“であり、ギリシャ語訳では「palarei-ponena」、”省略されたもの“の意味です。サムエル記と列王記に記されたイスラエルの歴史をユダ王国が正統的なイスラエル信仰の担い手であるとの見地から、短く記録したものということでしょう。また、ヘブル語聖書では歴代誌は聖書の最後の諸書と呼ばれる文書のその最後、即ち聖書の一番後ろの文書とされています。歴史書ではなく諸書の一つとされているのです。歴代誌は聖書正典として認められた最後の文書であったからではないか、と言われています。歴代誌の成立時代は捕囚から帰還後のエズラ、ネヘミヤの時代の後と思われ、ユダヤ教が成立して行く過程でのことでした。律法遵守、神殿礼拝を中心にしたユダヤ教の見地から書かれている、と言えます。ダビデは神殿建設の準備者、ソロモンは神殿建設を完成させた偉大な王とされています。ダビデのバテシバを巡る罪やソロモンの妻たちの異教信仰については記されていません。ダビデ、ソロモンの時代をイスラエルの理想的時代と考えるユダヤ教の立場に著者は立っているからだ、と言えます。歴代誌の概要は第一にアダムから始まるイスラエルの系図について述べています。ユダ族、シメオン族、レビ族に重点を置いています。これは、当初の南ユダ王国の構成族です。第二が神殿建設準備者としてのダビデです。「後書」に入り、第三が神殿建築者としてのソロモンについて述べています。神殿建設の文脈の中で両者の時代の歴史が語られているのです。第四、最後が南ユダ王国の王達の歴史であり、ペルシャの王クロスによるエルサレム帰還許可の話で終わります。

　先ほどお読みいただいた部分は、この神殿建築準備者ダビデの生涯の内、エルサレムに首都を定め、イスラエルの国内統一をほぼなしえて、これから宿命のライバル、ペリシテ人との戦闘に及ぶ直前のところです。ダビデへの神様からの約束が述べられます。これによってペリシテ人との戦争での勝利が約束された、とユダヤ教徒は理解したのでしょう。この部分は「ダビデ契約」と言われています。先程もうしあげたように第二サムエル記7:1-17がやはり「ダビデ契約」であり、内容的には両者が極めて類似した表現になっています。しかし、多くの小さな違いがあります。サムエル記の方ではダビデの以前の王については「サウル」という名をあげていますが、歴代誌の方では「あなたの先にいた者」という形で一般化されています。またサムエル記の方では「あなたの身からでる世継ぎの子」という表現でソロモンを特定していますが、歴代誌の方では「あなたの息子の中から、あなたの世継ぎの子を」という表現で、一般的に世継ぎのことを言っています。サムエル記の方は、歴史記述に近い表現であるのに対し、歴代誌の方は、ユダヤ教に基づいたイスラエル民族に関する表現である、と言えます。但し、この両方とも、ダビデに対しイスラエル民族への神の永久の祝福を約束していることに於いては変わりありません。一言で言えば、第二サムエル記7:9の神が「あなたとともにおり」ということです。第一歴代誌17:8でも全く同じ表現が使われています。ヘブル語で「ima:k」、ギリシャ語で「metasu」、英語で「with you」です。これが「神我らと共にあり」という表現になったのが「immanue:l」です。

　そもそも「契約」とは旧約聖書ではどのような意味を持っていたのでしょうか。旧約、新約と言う時の「約」です。旧約聖書では二つの言葉があります。「beri-t」と「ho:ze:」です。これは英語での「covenant」と「agreement」に対応しています。「heo:e:」「areement」の方は対等な者の合意、ということであり、旧約聖書では1か所でしか用いられていません。「beri:t」「covenant」の方は典型的には神様がイスラエルに与える約束のことであり、日本語では「契約」というより「約束」です。旧約聖書では284回登場します。基本的には神様のイスラエルに対する約束ですが、“神の前で誓う約束”の意味で人間同士での約束にも用いられます。結婚もこの約束です。銀行取引で借入人が銀行に対し、約束の文書を提出させられることがありますがこれを「covenant」と言っています。こんな世俗のことに神聖な言葉を使うのは憚られるのですが、金融業者ユダヤ人の伝統なのではないか、と思われます。いずれにせよ、「beri:t」「covenant」は神からの約束であり、「ダビデ契約」と言われているものもイスラエルの信仰から言えば「神の約束」です。ダビデと神様が交渉して決めたのではありません。

　旧約聖書での「契約」は通常「八つの契約」と称されています。それは「エデン契約」「アダム契約」「ノア契約」「アブラハム契約」「パレスチナ契約」「モーセ契約」そして「ダビデ契約」と「新しい契約」です。このうち「モーセ契約」は“律法を守りなさい。そうすれば神の祝福があります“ということであり、「行いの契約」と言われ「条件付き契約・約束」です。「ダビデ契約」は条件が述べられておらず、無条件契約・約束のように見えます。しかし、ダビデ、ソロモンに関する聖書の記述を見ますと、「ヤハウェー信仰」という条件が前提にあるように見えます。その「ヤハウェー信仰」も異教の神々への祭り・祭儀を行わない、とか、エルサレムにおける神殿での礼拝に参加するとか、広い意味での「行い」が前提になっています。ユダヤ教はイスラムのように善行をなすこと「ザカート」を義務とはしませんが、”ヤハウェ―信仰に基づく祭儀を行うこと“が最低条件になっています。その意味では「ダビデ契約」も条件付き契約とも言えます。しかし、最後の「新しき契約」は全く条件がありません。この「新しき契約」はエレミヤ書31:31にあります。「彼らの時代の後に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこうだ。－－主の御告げ－－わたしはわたしの律法を彼らの中に置き、彼らの心にこれを書きしるす。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。」とあります。その「神の契約・約束のしるし」として「神の子」がイスラエルに与えられる、というのです。イザヤ書7:14です。「それゆえ、主みずから、あなたがたに一つのしるしを与えられる。見よ。処女（おとめ）がみごもっている。そして男の子を産み、その名を『インマヌエル』と名づける。」とあり、クリスマスの聖句として有名です。「ダビデ契約」はユダヤ教祭儀の遵守という意味での広義の条件付き祝福でしたが「新しき契約」は典型的無条件契約です。この実現・成就が主イエス・キリストの降誕であり、新しき契約・約束は「神の国の到来」を告げる福音です。神からの一方的、無条件的契約・「恵みの福音」がここで実現しているのです。

しかし、ここで重要なのは「ダビデ契約」は「モーセ契約」との比較においては「行いの契約」というより「恵みの福音」に近い、ということです。むしろ「新しい契約」に近いということです。ダビデ以降のイスラエルの歴史の中で神殿礼拝という「条件」が出来上がっていくのですがこの歴代誌、サムエル記に記された「ダビデ契約」はいかなる条件も記されてはいません。その意味では、「ダビデ契約」は「モーセ契約」に示された「行いの契約」からエレミヤの「新しい契約」に至る媒介項的な役割をもつものだ、ということもできます。「モーセ契約」、「ダビデ契約」、「新しき契約」と覚えておいてください。でも考えてみれば「モーセ契約」に先立つ「エデン契約」、「アダム契約」、「ノア契約」「アブラハム契約」も基本的には無条件契約です。これらは創世記に記されている契約・神の約束です。これらはイスラエルが民族として形成される以前の契約です。神様の約束される相手は人類一般であり、イスラエル民族に限られるというものではありません。イスラエルに対する土地の取得約束である「パレスチナ契約」からイスラエル民族というものが浮かび上がってきます。パレスチナの地をイスラエルの民に与えるという土地契約がその中心にあります。「モーセ契約」は神様とイスラエルの契約であり、人類全般との約束ではありません。しかし、その中に「十戒」のように人類全体に対してともと言って良い普遍的倫理を示している部分もあります。これは新約聖書において「良心」という表現で出てきます。律法の基本になるような人類にとって普遍的な神から与えられた心、ということです。「ダビデ契約」についても類似のことが言えます。ダビデとその子孫イスラエル人、ユダヤ人への神の祝福の約束というのが直接的な意味ですが、新約の時代に入り、主イエス・キリストの従う「あたらしきイスラエル」の群れ、に対する祝福の約束、と解釈できます。この「新しきイスラエル」を単純に「キリストの教会」、カソリック即ち普遍的教会と同じとしたのがローマ・カソリック教会です。宗教改革以降はこの「見える教会」を超える所に霊的意味での「普遍的教会」があり、それが真の意味でのカソリック・普遍的教会なのだ、と理解されています。この「ダビデ契約」は形を変えて、今の我々の時代にも生きた神の約束として存在している、と言えます。じつに、この八つの契約と新約聖書での「新しい約束」のそれぞれに時代における理解、その歴史的意味の変遷、そして現代のキリスト者・人類全般に対する神の契約・約束の意味を考えると、その壮大なかつ時に実に壮絶な、しかし恵みに満ち溢れた神の契約が思い起こされます。これこそイスラエルの信仰が指し示す「希望」なのです。私たちキリスト者にとっては主の再臨が主イエスの約束であり、神の約束に信頼を置く「希望」なのです。これは、新約聖書では「マラナタ」「主よきたりませ」と表現されています。ダビデ契約はこの八つの契約の一つですが、エレミヤの「新しき契約」の実現という形で、新約の時代にある我々に「希望」を与えているのです。

　では本日のダビデ契約の箇所を具体的に見て見ましょう。17:1-10には神殿建設に係る事柄が記されています。ダビデはエルサレムを首都とし、自分の宮殿が出来上がったのを見て、神様は粗末な幕屋即ち遊牧民のテントに住まいを置いてあるのは問題なので、立派な神殿を作りましょうか、と預言者ナタンに問います。ナタンは「それはよいことだ。すぐやりなさい」と言います。しかし、その夜、ナタンに神様が現れて、「いつそのような神殿をつくれ、といったか」という神の言葉が臨みます。これは神の怒りの言葉と解釈することもできます。“イスラエルの神は、世界にあまねく居るのであって、人間の作った神殿などに住まいを持つ、というものであるはずがない、何もわかっていない“という訳です。人間は、形にしなければことがおさまりません。「神は霊である」とは言っても、教会堂という形のあるところで、共同体として集団で祈らなければ、「霊なる神」への信仰の証はされない、と考えてしまうのです。ここには人間はどうしても見えるものが欲しくなる、ということと、一人だけではなく集団でいることによって生きることができる、という真理が示されています。この人間の弱さというか性（さが）ということも神様は当然ご存じでそれを満たす道も示してくれています。この時の「神殿否定」の神の言葉は、後の歴史が示しているように神は神殿建築を容認いたします。しかし、この神殿というのがくせものです。エルサレム神殿での礼拝を守る者が真の信仰者であり、これを守れないものはユダヤ信仰の落第生にされてしまう、のです。貧しくて、エルサレムまで旅をすることのできない一般民衆は神殿礼拝はできず、信仰者から外されてしまうのです。そこで、イエス様の神殿否定とも言うべき言葉の復活があるのです。

「ダビデ契約」の興味深いところは、このような神殿建設に代え、ダビデの家系を家とみたてそれに祝福を与えるのです。17:10です。「それは、わたしが、わたしの民イスラエルの上にさばきつかさを任命したころのことである。わたしはあなたのすべての敵を屈服させる。わたしはあなたに告げる。『主があなたのために一つの家を建てる。』」とあります。サムエル記では7:11「それは、わたしが、わたしの民イスラエルの上にさばきつかさを任命したころのことである。わたしはあなたをすべての敵から守って、安息を与える。さらに主はあなたに告げる。『主はあなたのために一つの家を造る。』」とあります。「主があなたのために一つの家を建てる」と言われています。ヘブル語で「家」は「bait」と言いますが、物理的な意味での「家」のみならず家系という意味もあります。マタイの福音書の最初にある家系図では主イエス・キリストはダビデの系図に属することが示されています。ダビデ契約の箇所でダビデが物理的神殿という神の家について言っているのに、神の言葉はダビデの家系と言う意味で、より精神的な意味になっています。しかも人間が作るのではなく、神がこの「家」を建てる、という形で神様からの一方的宣言になっている、ことです。「ダビデ契約」は神への願いに神が答え約束する、という性質のものではないのです。人間が感謝のしるしとして捧げた者を「ありがとう」と言ってその報酬を約束する神様でもないのです。人間は神様のことを「忖度」すべきものではないのです。あくまでも主人は神であり、神に信頼を置くことが人間のつとめだ、と言っているのです。いかなる意味での神と人間との約束事もイスラエルの信仰はこれを否定します。考えてみると、神様と取引をしようとしている自分をみることがあります。イスラエル信仰の基本は、一方的な神の恵みと、それを受け入れるだけの人間、ということで出来上がっているのです。それはキリスト教信仰においても全く同じです。

このあとは「ダビデ王国」に関する「ダビデ契約」です。先に約束されたダビデの家系が、ダビデが打ち立てた「ダビデ王国」において、ダビデの家系がとこしえに続く、と約束されています。第一歴代誌12:12で「彼はわたしのために一つの家を建て、わたしはその王座をとこしえまでも堅く立てる。」と約束し17:14では「わたしは、彼をわたしの家とわたしの王国の中に、とこしえまでも立たせる。彼の王座は、とこしえまでも堅く立つ。」と言われています。イスラエルの王国の王座は永遠にダビデの家系にある、ということです。サムエル記の方でも、「彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしはその王国の王座をとこしえまでも堅く立てる。/あなたの家とあなたの王国とは、わたしの前にとこしえまでも続き、あなたの王座はとこしえまでも堅く立つ。」と言われています。ここで注意しなければならないのは王国そのものが永遠に続く、とは言われていない、ことです。「ダビデ契約」はダビデとその家系に対する祝福であって、イスラエル王国そのものに対する祝福ではないということです。そもそもイスラエルの信仰は王制に対し懐疑的です。サウルが王となったのも、民衆の声に押され、サムエルがこれを容認したからです。「国家」というのは人間による人間の支配を正当化する暴力的な組織です。イスラエルのそもそもの信仰は「神のみが支配者」というものでその代理人など認める信仰ではありません。この国家による犯罪によっていかに多くの悲劇が生み出されてきたことか枚挙にいとまはありません。これは神様を悲しませる事柄です。神様はこの悲惨な人間に罪の現れをも通して、神の御旨に従う民の立ち返りを待ち望んでいらっしゃるのです。この「人間による人間の支配」という国家の宿命的性格を和らげるために生まれたのが「被支配者の代表による人間の支配」という代表制民主主義が近代において生まれました。その意味で、政治的民主主義は「国家」による横暴を止めさせるための方策だといえます。神の恵み、の一つと言ってもよいでしょう。イスラエルは弱小民族でしたから、この国家の犯罪性はあまり際立って現れて居ませんが、当時で言えばエジプト、アッシリヤ、その後の、ローマ帝政、そして東洋では歴代の帝国においては国家の暴虐は時に残虐極まりない事柄も「国家的正義」の下で正当化してきました。最近ではソヴィエトそしてロシヤ、そしてアメリカ政府の暴虐は民主主義の名に恥じる事柄です。「ダビデ契約」は「ヤハウェ―」の名を叫ぶ国家に祝福を与えるものではありません。所謂国家主義はイスラエル信仰の忌み嫌うものだと断言しても差し支えない、と思います。

では「ダビデ契約」はダビデ以降どうなって行ったのでしょう。国家としてのイスラエル王国は分裂し、それぞれ北王国、南王国となりますが北はアッシリアに、南は新バビロニアにそれぞれ滅ぼされます。しかしダビデの家系であるユダヤ王国のなかで民衆の「神への希望」「メシア期待」として継続します。また散らされた民のなかにもこの信仰が守られ、ヤハウェ―によって選ばれた民の信仰として根付いていきます。宗教のみによる共同体である民族、ユダヤ民族が成立し、今日に至っています。この地上的国家と霊的な意味での「ダビデ王国」は分離しますが、その両者の関係は非常に微妙な緊張関係にあったと言えます。これが「政治と宗教」の関係として古来からの論争とされてきました。これは「国家と教会」の問題と置き代えることもできます。ギリシャ正教を始めとする正教グループ、イスラム教におけるウンマといわれる共同体においては国家と教会がつまるところ一体のものとされています。西欧の歴史的伝統はこの国家と教会を分離することによって、集団的暴力の程度を和らげよう、とするものです。この意味で、大日本帝国憲法は国家主義、日本国憲法は政治と宗教の分離主義であるといえるでしょう。イスラエル信仰の基本は国家に対しては懐疑的であるが必要悪としての範囲でのみこれを認める、というものです。それより重要なのは信仰共同体です。今の私たちキリスト者で言えば「教会」です。一時教会も軍事力を独自に持ちました。また国家の軍事力を教会の都合に合わせ利用いたしました。しかし、これ等はすべて「ダビデ契約」の流れに在るものではありません。信仰は「信ずる」ということですから第一次的には内面的な事柄です。現代の信仰においては「神と私」が基本になければなりません。そしてその個人が信仰を、苦楽を共にする共同体における信仰ということになります。「ダビデ契約」はこの信仰共同体に生き続けている、と考えられます。地上の国家はヤハウェ―信仰を守り、育てる意味においてのみ積極的に評価する、というのがイスラエル信仰であり、我々キリスト教の基本でもあります。「国家」に対しては消極的受容に留まるべきなのであって、これを信仰拡大のために積極的に活用しようなどとすると、主なる神の怒りに触れることになります。私たちキリスト者は教会を大切にするとともに、地上の国家に対しては常に懐疑的であるべきだと思います。それが現代における「ダビデ契約」の継承ということなのではないでしょうか。祈ります。

（ご在天の父なる御神様、今日のこのひと時を感謝致します。今日は神様がダビデに永遠の祝福の約束を与える箇所を見ました。私たちも、主イエスによって、この祝福に連なる者とされました。しかも、この祝福は、「新しき約束」として私たちに、「神の国」到来の約束として示されました。この恵みに感謝致します。この恵みの下で平和をつくる者とさせて下さい。主イエス・キリストの名によって祈ります。アーメン）